



平成28年度 果樹情報 第14号

(平成28年10月7日)



福島県農林水産部農業振興課

1 気象概況 (9月後半：果樹研究所)

平均気温は、平年と比較すると4半旬が20.0℃で0.7℃低く、5半旬が19.6℃で0.6℃高く、6半旬が21.0℃で2.9℃高く経過しました。

この期間の降水量は143.0mmで平年の181%でした。

2 生育概況

(1) 果実肥大 (10月3日現在)

りんごの暦日比較では、「ふじ」は縦径102%、横径106%と平年に比べ大きく、また、満開後日数による比較でも平年より大きい状況です。

表1 主要品種の果実肥大
(暦日比較 果樹研究所10月3日調査)

果実肥大	りんご	
	縦径	横径
実測値(mm)	80.9	90.8
平年比(%)	102	106

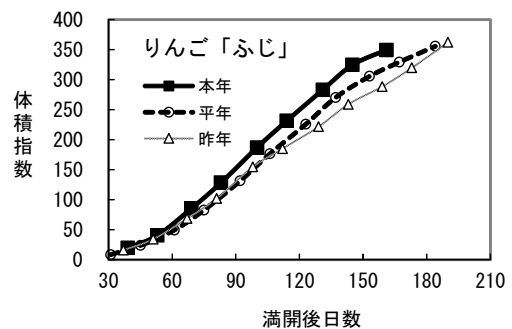


図1 りんご「ふじ」の果実肥大

(2) なし

ア 主要品種の収穫期と果実品質

主要品種の収穫盛りは、平年と比べ「幸水」と「ラ・フランス」で9日早く、「豊水」で10日早く、「二十世紀」では12日早まりました。収穫時の平均果重は「幸水」ではほぼ平年並、「豊水」では平年より小さく、「二十世紀」と「ラ・フランス」では平年より大きくなりました。糖度は「幸水」と「豊水」では平年並、「二十世紀」と「ラ・フランス」では平年を下回りました。

表2 なし主要品種の収穫期と果実品質

品種	収穫始(月/日)			収穫盛(月/日)			収穫終(月/日)			果実重(g)			糖度(° Brix)		
	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年	本年	平年	昨年
幸水	8/19	8/25	8/18	8/22	8/31	8/23	8/25	9/6	8/27	376	380	320	12.8	12.6	11.6
豊水	9/1	9/13	9/2	9/9	9/19	9/9	9/20	9/25	9/14	413	429	336	12.9	12.8	11.7
二十世紀	9/7	9/18	9/9	9/10	9/22	9/11	9/12	9/27	9/14	421	401	382	10.9	11.2	10.8
ラ・フランス	9/28	10/6	9/28	9/28	10/7	9/28	9/28	10/9	9/28	310	294	301	12.0	12.9	12.3

注) 平年値は、1986～2015年の平均値

(3) りんご

ア 「ふじ」の果実成熟

9月27日(満開後157日)の「ふじ」の成熟は、硬度は14.0ポンドで平年より低く、デンプン指数は3.4でデンプンの消失は平年よりやや進んでいます。果皮に含まれるクロロフィル含量は平年並、アントシアニン含量は平年よりやや低く、着色は遅れています。

※ りんごのデンプン指数：指数1～5 数値が高いほどデンプンの消失が進んでいます。

(4) ぶどう

ア 「シャインマスカット」の収穫期と果実品質

収穫始めは9月16日で、平年より6日遅れました。9月27日の収穫果の果実品質は、果房重が797g、1粒重が16.4g、糖度が17.1° Brix、酒石酸含量が0.22%、糖酸比が76.6でした。

3 栽培上の留意点

(1) りんご

ア 「ふじ」の収穫前管理

りんごの果肉硬度は平年よりも低下していますが、着色は進んでいないため、着色管理は遅れないように実施しましょう。1回目の葉摘みは、果実に直接触れるような葉を中心に玉回しと併せてやや軽めに行います。10月中旬以降は、個々の果実がしっかり着色するよう丁寧に実施しましょう。

イ 中生種の収穫

地色、着色、デンプンの抜け、果実の肉質、食味等から総合的に判断し、品種特性に応じて収穫適期の品種から収穫しましょう。なお、わい性台樹の生育は、マルバ台樹よりも5～7日程度進む傾向があるため、収穫が遅れないよう注意しましょう。

(2) ぶどう

ア 基肥の施用

基肥の施用は、落葉前の10～11月に行います。「巨峰」成木における施肥の目安は、窒素が6kg/10a、リン酸が8kg/10a、加里が8kg/10aです。

なお、樹勢が強い場合は窒素の施用量を減量します。また、礼肥で施用した分や、堆肥や有機質肥料および土壌改良時に施用する分は差し引いてください。油粕などの有機質肥料は分解に時間がかかるので、10月中旬までに施用しましょう。

イ 間伐・縮伐

樹冠が拡大し枝が混み合ってきた場合、早めの間伐や縮伐を実施しましょう。間伐や縮伐は収穫終了直後に行うと良いです。この時期はまだ葉があるため、枝の混み具合がわかり、残った枝に良く光が当たるようになり、養分蓄積にも有効です。

4 病虫害防除上の留意点

(1) 病 害

ア ももせん孔細菌病

9月は平年よりも降水量が多かったため、新梢葉や枝への感染が懸念される状況にあります。翌年への越冬菌密度の低下を図るため、秋期防除を確実に実施しましょう。

イ なし黒星病

冷涼多雨な気象条件では翌年の伝染源となる芽への感染が増加するため、2回目の秋期防除を実施していない園では速やかに防除を行いましょう。